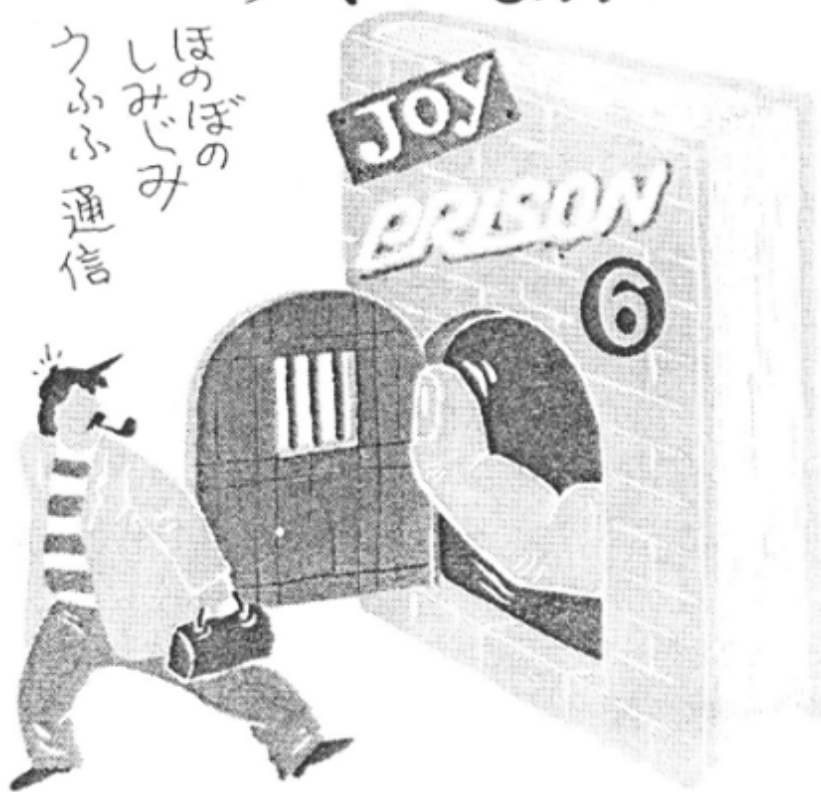


自主懲役囚の パツキーな休日



東江一紀

うふふ、ようやく仮出所できました。と、胸を張って言える状態ではない。七か月に六冊訳了という自主懲役に服したのは、去年の二月。ところが、その七か月のうちに訳了できたのは、リーガル・サスペンスとプリズン・サスペンスの二冊だけだった。刑期を一か月延長して、ハードボイルド・

エスピオナーージュを一冊訳し終え、やっつき四冊めの某国大統領自伝に着手。これを二か月ぐらいですすいとかたづけしてしまう予定が、いやあ、全然進まないの。どうやらわたし、飾り気のない素直な原文とどうやつと波長が合わんようです。もがき苦しんでいるあいだに、五冊めのノ

ンフィクションを出版社から引き上げられてしまった。締切りを四か月も過ぎて、取りかかれる見込みさえ立たないんだものねえ。情けないやら、申し訳ないやら。

自伝のほうははずると年を越してしまい、二月も半ばを過ぎて、ようやく訳了した。そう、七か月に六冊のはずが、十三か月弱で四冊しか仕上がらなかったのだ。

あと一冊残っているけど、このワーカホリック・モードとは、そろそろおさらばしたい。身が持ちませぬ。

とまあ、白旗あげての仮出所なのだ。

それにしても、この一年ちよつとのあいだ、よく働いたよなあ。土日、祝日、夏休み、冬休み、盆と正月まで返上して舍房へ出勤し、極力出歩かず、本を読む時間を削り、真綿で自分の首を締めるように、じわじわ、ずんずんと囚人化していった。

♪真綿変わりはないですか

仕事寒さがつのります

などと呑気に歌っている場合ではない。

人生半ばを過ぎたおじさんとしては、これ以上、仕事一色で貴重な時間を塗りつぶしているわけにはいかんだ。本も読みたい、映画も観たい。妻にも、子どもにも、余裕をもって接したい。しばらく会っていない友人・知人と会って、互いの生存を確認したい。こ

れからの人生に、じっくりと思いを馳せたい。青春したい、哲学したい、豊かな時間を過ごしたい。やりたいこと、やっておこななくてはならないことが、いっぱいあるんです。

というわけで、とりあえず、おじさんはパチンコに行くことにした。いえ、つまり、その、時間は有意義に使わなくてはならぬという強迫観念から逃れるのが、豊かなミッドライフへの第一歩なんだからして……。

いやあ、ご無沙汰ぶりだなあ（どこの言葉じゃ？）。この前パチンコ屋に来たときは、台の右枠に小さな穴があいてて、客は左手で玉を一個ずつそこに入れ、右手でハンドルをはじいていたものだが……って、うそ、うそ。そりゃ三十年前の話だよ。今は、デジタル機全盛の時代です。

あから、しばらく来ない間に、一般機の人気銘柄だった「冒険島」も「駒駒クラブ」も、CR機になっちまってる。つまり、「パッキーカード」というプリペイドカードでしか遊べない機械だ。警察もずるいなあ。連チャンばか当たりの機種が人気を集めると、射倖心をあおる“などという理由で規制するくせに、CR機だけはお目こぼしで、店の側がカード化せざるを得ないように仕向けている。そして、カードのメーカーが警察官僚の天下り先になつていくというんだから、まさにマッチ

ポンプ式。日本という悪しきシステムの縮図がここにある。

と、『噂の真相』で仕入れたネタをもとに、体制への怒りをほんの一瞬だけ爆発させたあと、わたしは一万円のパッキーカード（玉五百円分のおまけ付き）を買い、CR冒険島の前に座る（闘わないやつちゃんなあ）。確率変動凶柄でも引き当てて、二、三時間遊ばせてもらい、四、五万円稼ぐというのが、本日の謙虚な（どこが？）目標でございます。

おや、おや、本を読みながら、台も見ずに打っている学生風のおんちゃんがいる（まじめにやれよな、おい）。かと思うと、右隣りに座ったキャリアアウーマン風のおねえさんは、リーチがかかるたびに、台に向かって気合を入れて（台が畏縮しますよ）。幼児を膝に載せて打っている若いお母さんもいる（子どもの首、締めないでね）。その幼児の兄貴らしいがきがちよろちよろと走り回っている（気持ちにはわかるけど、うるさいぞ）。いやはや、最新の電脳賭博機は、実にさまざまな客層を引き寄せているようだ。

しかし、出んのう。

ほんの四十分ほどで、わたしめのパッキーカードの残高はゼロになってしまった。お、一万円分の原稿書くのに、何時間かかると思ってるんだ！

悄然と席を立ちかけると、左隣りのおばさんが、「この台に、三万突っ込んじゃったよ」とつぶやいている。そういえば、あのマッド・スカダー訳者は、一日に十二万円負けたことがあると言っておった（パチンコ屋にそんな大金持っていたの？）。うむ、一万円ぼつちでくじけてちや、世の中渡っていけないのじやなかるうか。そんな弱気だから、訳書が売れんのじやなかるうか……。ついつい、二枚めのカードに手がのびそうになる。

でもなあ、家に帰れば、病弱な妻と強欲な子どもたちが腹をすかせて待っているのだ。それに、わたし、競馬場に朝から出かけて、十二レース全部に賭けるときでも、総出資金を一万円に抑えちゃうという、超貧乏ギャンブラーなんである。それでなんとか、きょうまで綱渡りで暮らすことができたのである。小心さは、わたしのたったひとつの資産だと言っている。

そう、我慢だ、我慢。いつか運命の女神が微笑んでくれる日が来るさ。と、おじさんは肩を落として、たそがれの街に消えていくのであった。「パーラー・ラスベガスに預金一万円」とつぶやきながら。

なんだか、わたし、ワーカホリックをやつてるときのほうが豊かな時間を過ごせている気がするのだが、思い過ぎかなあ。